

〈追悼文〉ウミンチュ、クリスチャン、そして 学究として

KATO, Hisako / 加藤, 久子

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言

(巻 / Volume)

18-19

(開始ページ / Start Page)

33

(終了ページ / End Page)

34

(発行年 / Year)

1995-02-24

ウミンチュ、クリスチャン、そして学究として

加 藤 久 子

南島出身の言語学者はクリスチャンであった。琉球大学2年の時の受洗であったことを、私たちはカトリック教会で行われた告別の日に告げられた。かの沖縄戦で肉親を亡くされたことも信仰をもつきっかけとなったと紹介された。病に倒れられてからも、決して希望を失うことなく、病魔と向き合いながら癒える日を静かに待っておられたのだ。月に二回の神父様の来訪を楽しみに過ごされたという。病院でお目にかかった時は衰弱されて声も弱々しくなってしまうれていたが、終始穏やかな表情で、むしろ私の仕事を励まして下さった。強固なその精神力に胸をつかれる思いであった。

つきっきりで看病をされた夫人は「闘病の月日が初めて二人でゆっくり過ごせた時間でした」と、いま静かに思い起こされている。いつも精力的に仕事に立ち向かっておられた先生の、はじめて最後の休暇であった。

言語学者は聖書とどのように対峙していたのであろうか。「太初に^{はじめ}言^{ことば}あり」(ヨハネ伝第一章第一節)と記されるように、なによりも聖書は言葉の世界である。琉球諸島における原郷であり、文化史的にも深い意味を持つ「ニライカナイ」の語源と原義に新しい考察を試みたこの言語学者に、ヨハネ伝の聖書記者の精神を重ね合わせるのには性急であろうか。いかなる受難の歴史のなかにあっても、いつの日か必ず豊穡がもたらされると信じるニライカナイは、一般には「海の彼方の浄土または楽土」と解釈され、超自然観と結びついた他界観とされる。しかし、そうだろうかと中本正智先生は考えた。太陽神との密接なかかわりをもつニライカナイの宇宙観は、琉球独自の文化にとどまらず、東南アジア諸国に広まっていると言及し、語源の完璧性を求める。この語はミロヤ(土の屋)、カナヤ(日の屋)という類似語で構成され、その原義は地の中の太陽神の居所であると結論づける(『ユリイカ』青土社、1985年1月号)。琉球文化のキーワードに対する衝撃的な指摘であった。

語源の思想的基盤の成立を果敢に解明する中本先生の精神的背景には、労働の海が存在する。正智少年は、沖縄島知念半島の南岸沖にあるサンゴ礁に囲まれた小さな島、玉城村奥武島の漁家に生まれた。リーフ(礁縁)に囲まれた周辺の海のイノー(礁池)は魚の棲み家であり、島の子供たちは老練な漁夫の指導を受けて一人前のウミンチュ(海人)になっていた。パンタタカー(小型追い込み網漁。ちなみに先生はタタチャー(叩漁)と表現される)は、訓練をかねて老人と子供の漁として行われていた。正智少年も例外ではなかった。

「祖父が船の上では別人のように厳しかった。漁具の竿で背中を叩かれ、その恐ろしい顔

に、幼い僕はひどくショックを受けた。膝の上に抱いてくれる普段の優しい祖父からは想像もつかないことだった」と「板子一枚下は地獄」の海上労働の厳しさを学んだ少年の日の思い出をお聞きしたことがあった。

潮の流れを受けるように岩礁に袖網（垣網）と袋網を設置し、浅瀬の魚群をサバニの上から竿で海面をパンパンと叩き、海底を突き、船べりを櫂で打ちつけながら魚を脅して魚群を袖網に追い込む。船頭意外のメンバーはいっせいに海中に飛び込み、立ち泳ぎをしながら袋網に巻き込むという潜水漁法である。著作によればこうだ。

「はじめてこの漁を覚えたころの話である。船で魚を追いかけてきたまではよかったが、いざ飛びこむ段になって、海が深く、あまりにも黒々としていたので、鯨がいるのではという思いがよぎって、飛びこむのを躊躇した。一瞬おくれて飛びこんでみると、そこはもう網の裏側だった。舟はすでに網の上を走り過ぎていたのである。網の裏側から眺めていると、逃げ帰る魚が悠々と尾鰭を左右に振っているところだった。こんな調子では小魚ひとつ捕れるはずはなかつた」（中本正智・比嘉実『沖縄風物誌』大修館書店、1984年、93～94頁）。

そんなもとウミンチュの片鱗をお見受けする機会があった。軍用地に接収された『失われた集落小湾』の調査で一緒にいたある夏の日、メンバーの数人と波の上の人工浜で泳いだ時のことだ。スイミングスクールに通い、覚えてたの私は競泳用の水着にキャップ、ゴーグルを付けた水泳選手並みのいでたちで海に飛び込んだ。しかし、常に底の見えるプールとはいささか違っていった。背が立たない深さになるともう恐ろしくて戻ってきてしまう、情けないスイマーであった。一方、海人先生の泳ぎは見事であった。太い腕を振り上げ、しぶきを上げて水を蹴る脚は伸びやかでリズムカルだ。その美しいフォームに私はしばし見とれた。すぐ波打ちぎわに戻る私の様子を見かねて、海人先生は海中では立ち泳ぎを覚えておくと、深みの中でも怖くないと教えて下さった。あの追い込み漁の立ち泳ぎだ。アップアップしながらの楽しいひとときだった。

海からの帰り道、カナズチだった私が水泳を習い、健康で持久力もついたことなどを、熱心に聞いてくださり「僕の大学でも昼休みだけプールを一般にも公開しているので、時間を作って体力作りのつもりで泳ぐようにしようかな」と話されていた。

先生の健康に関しては、以前に簡単な手術をされて、数か月で普通の生活に戻られた。それほど恵まれた肉体をお持ちなのだというのが、私の当時の認識であった。この認識はご自身も同様であったと、のちに夫人からお聞きした。

手術後の病魔が唐突に襲ったのはそれから間もなくのことだった。誰も予期しないできごとであった。ウミンチュの肉体と知の世界をもった稀有な学究は、あの勇壮な遊泳を最後に天国（後生）に旅立ってしまわれた。しかし残された多くの業績は、琉球文化の「真の語源と原義」を追求する礎として機能し、復活と再生を繰り返していくに違いない。

（法政大学沖縄文化研究所国内研究員）